

芸術新潮

Geijutsu Shincho

December 2024

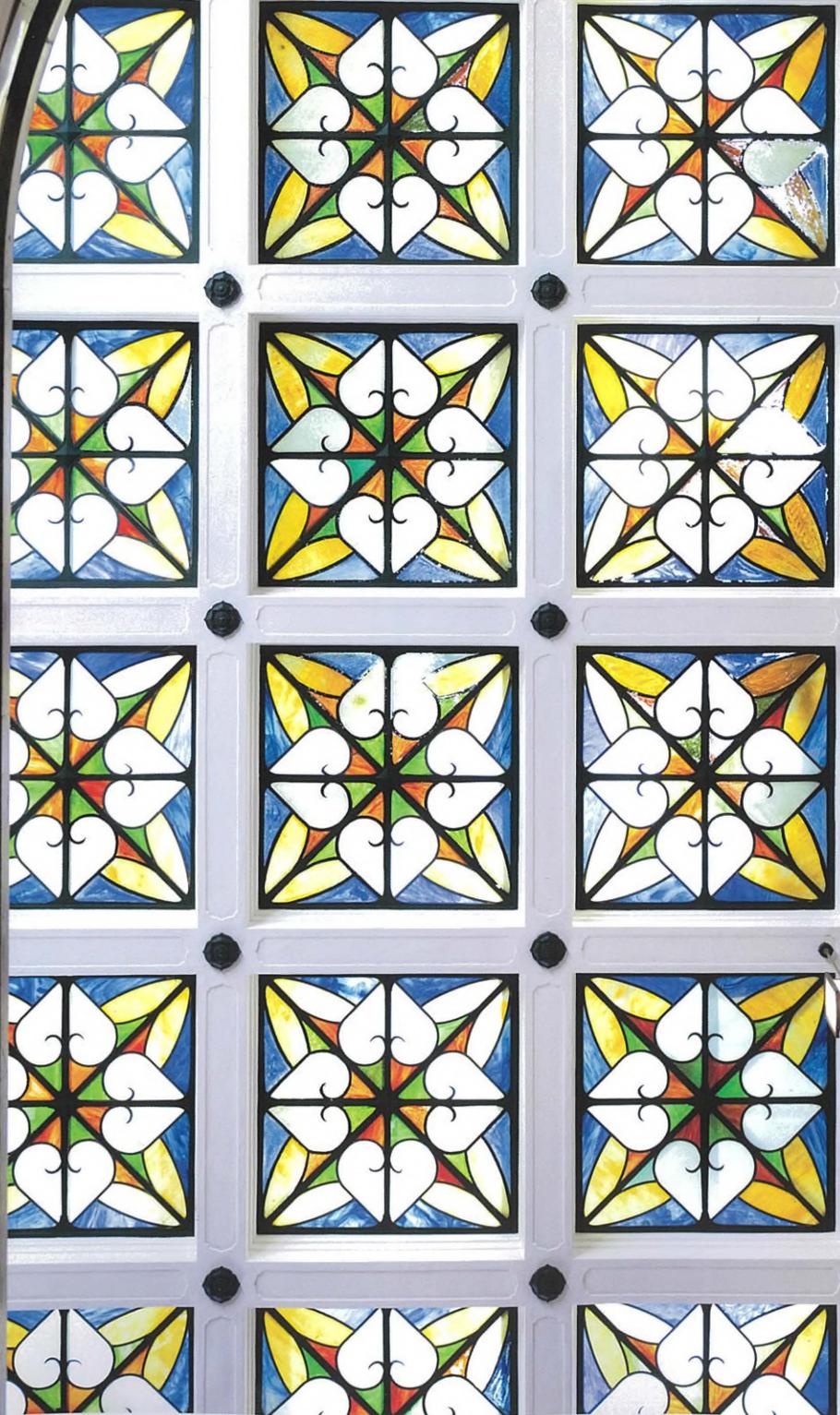
12



創刊900号記念特集
決定版

大・京・都

みやこのみやび
海と山





田口涼一《Sound of Silver 一月の藪一》

2023年 焼箔・純金箔・純金泥・耐変色銀箔・銀泥、雲肌麻紙 91×73cm

1981年、大阪府生れ。京都精華大学大学院博士課程修了。江戸時代は門外不出の「深秘」とされていた技法「箔焼き」で制作。銀箔を硫黄で硫化させて変色させるのだが、試行錯誤を重ねた末に銀の特性を自由自在に制御することができるように。金箔や金泥、銀泥も用いることで、画面により豊かな表情を与えている。



江上里絵子《TWE_O57》

2024年 アクリル、クロス 91×62cm

1989年、奈良県生れ。京都市立芸術大学大学院修士課程修了。温度や湿度、匂い、話し声——目に見えない「空間」にはさまざまな情報が入りこんでいる。モチーフそのものではなく、モチーフを取り囲むその「空間」を描こうと試みる意欲的な作品を手がける。目指すところは、具象画でも抽象画でもない「空間画」という新たな境地。



山崎愛彦《8da0b6 (Big grass)》

2022年 アクリル、カンヴァス 162×130cm

1994年、北海道生れ。京都市立芸術大学博士課程在籍中。「新京都」展初参加。日々の生活のなかの風景を撮影し、一度SNSに投稿。シェアした画像をコラージュして下図をつくり、描画。デジタル時代において絵画をいかに捉えるべきか。消費されていく画像をベースに検証する、実験的な創作で注目されている。



田中梢《2020.7.19(栈橋)》

2022年 油彩、カンヴァス 130×162cm

1986年、大阪府生れ。京都造形芸術大学(現・京都芸術大学)大学院修士課程修了。「新京都」展初参加。独特の静けさが漂う風景画は、よく見ると小さく人物が描かれている。自ら撮影した写真をもとに、写り込んだ見知らぬ人びとを描くという田中は、さまざまな視覚情報が飛び交う現代社会において、風景画の立ち位置を模索する。

いまきょうと 新京都

—古都から千年先へ—

古き良き日本の文化や美術を連綿と受け継いできた京都という場所から、日本の現代の作家の魅力を発信し、千年先まで作品を残していきたいという想いが込められた企画展。開催は3回目で、京都ゆかりの若手作家5名の作品を紹介する。



樋口新《バンサーと松と牡丹》

2023年 岩絵具・アクリル、高知麻紙 112×146cm

1988年、三重県生れ。京都造形芸術大学(現・京都芸術大学)大学院修士課程修了。岩絵具の発色を生かした日本画ならではの色鮮やかさに、点描の技法が加わった独特の作風で若手ながら海外でも評価が高い。モチーフは動植物で、なかでもカメレオンが多く登場。環境によって七色に変化するさまを、人間の複雑な感情の象徴と捉えて描いている。

INFORMATION

住所 京都府京都市東山区上堀詰町265-7
電話 075-532-3001
開廊時間 11:00~19:00
定休日 無休(年末年始をのぞく)
アクセス 京阪電鉄「七条」駅から徒歩すぐ
URL www.tamenaga.com

EXHIBITION

新京都(いまきょうと)
—古都から千年先へ—
11月23日(土)~12月15日(日)



「工芸から派生した芸術」展(9月28日~11月4日、終了)より、村本真吾(1970年生れ)らの作品が並ぶ一角。
撮影:大塚和則(下も)



築100年を超える町家を改修。京都国立博物館から徒歩数分で、京都駅から車なら7分程度の好立地。

ギャラリーためなが京都

京都から発信する
日本の美術の“今”



「ギャラリーためなが」が京都に店を構えて4年目を迎えた。立ち上げにあたって為永清嗣社長は「文化遺産を楽しみに京都を訪ねる方々に向けて、日本の今の美術も見てみませんか?と提案する場所を作りたい」と言う。近現代の巨匠作品を扱う画廊というイメージが強いが、50年以上の歴史をもつ銀座や大阪、パリの店舗と異なり、京都は新店とあって挑戦的な企画を立てやすいそうだ。工芸の技術をもとにした芸術作品に焦点を当てた「工芸から派生した芸術」展(終了)もそのひとつで、高い技術力をもつ漆芸作家たちによる作品が並んだ。

新鋭に注目するのは開催中の「新京都」展。サブタイトルの「古都から千年先へ」が示すとおり、未来に残る作品を生み出そうと意気込む企画展だ。「長きに渡って評価される作品とは?それは私にも分かりません(笑)。ただ私が大切にしているのは、きちんとした技術と表現力、その上での自己表現。若手作家には、革新的なことをしなければ!というプレッシャーもあり、斬新な材料を使ったり、組み合わせたりしがちです。けれど、短期間での剥落や色褪せの懸念はないのか。チャレンジは大事だけれど、素材の勉強も必要です。そういったことも含めて制作と向き合う若手たちが育ってほしい」

千年後を想像しながら、可能性を秘めた作品たちを眺めるのも一興だ。